

経験批判論（註）の二冊だけである。前者は、一九〇五年革命後の「バルカン戦争」の先鋭的となり、反動下の「恩恵」の時代における召喚主義との、後者は、いさぎよく「ニエーター」の闘争に際しての論議である。

召喚主義との闘争を「理論的」に打ける徴に解党主義とのそれと同一視するのは全く畢竟論議である（P. 44）。解党主義がメンシエヴィキの広汎な部分をつかみ非合法組織の解体を求めたのに対し、召喚主義はまさにレーニンとともに非合法組織の強化を前提とし、その枠のうちに打ける公然活動からの全面的召喚を主張したのである。

レーニンは一九〇五年の革命の大衆の経験を継承し発展させて打ける保障を非合法地強化の下に打ける非公然、公然活動の拡大に求めた。「なにをなすべきか」「一歩前進、二歩後退」の時期におけるいわゆる「地区の規律」の内容は決定的に深化させられればならなかつた。その「レタリヤはソビエトを創出し指導的階級としての自己を顕わしてあり、かつてはその広汎な層が「レタリヤ」支持である。たいてい「レタリヤ」が敵対的關係に転じ、まさにそうすることによって革命の「経済的内容」に反逆しはじめたからである。それゆえ、「バルカン戦争」の東中点としての「国会ボイコット」から一九〇八年以後国会利用を主張して召喚主義者との闘争に転じたときは、他方で非合法組織の解消を求めた解党主義「メンシエヴィキ」の苛しくない闘争が推進されてきたのであり、レーニンはあくまで党的統一を追求し続けたが、非合法組織の一点に固執しては、党決定にすら反して堅持せねばならなかつた。「レタリヤ」の革命的階級への形成」とはかく行われるのである。

召喚主義（及び最後通牒主義）は、非合法組織の中心であり、かつホルシエヴィキ派の中心であった「秘密財政・軍事委員会」の三人組のうちレーニンを除く二人をはじめとする部分に打って形成された。その思想「マツハ主義」は、その母国ドイツにおいては、デューリング（ヘーベルも一時感化された）や新カント学派（ベルンシュタイン）の社会民主党をおかしはしなかつた。たまたま、内容としては依っている。それゆえ、「唯物論と経験批判論」は、ほとんど、「反デューリング論」へのマツハ主義の「批判」に対する「反批判」として展開されており、ほぼエンゲルスへ部分的には「ハーノフ」そのままであり、同様の「穴窟」を内包している。（だから「理論」の号の如く、このことに関する反省を行うことなく、「唯物論と経験批判論」の章句のありこを抜き出して、「修正派批判」をやった

つもりになつても全く無意味だということだ。）しかし、この本の中で、第五章「自然科学における最近の革命と唯物論」の問題、つまり「極的評価がなされておかぬはならない」。

すなわち、「マツハ主義」に関する文献を手にすれば、唯物論を論破した等々、等々と称する新しい物理学が得々として採用されているのに出あわずに、これは出来ない。そうした採用が根拠のあるものかどうか、は別問題である。しかし、新しい物理学、あるいはもっと正確に言えば、新しい物理学における一定の学派と、マツハ主義及び現代の観念論哲学の他の変種との結びつきは、いささかの疑いもない。この結びつきを無視してマツハ主義を研究するのは「ハーノフ」がそれをやっているか——弁証法的唯物論の精神を愚弄することである。すなわち、エンゲルスのあれこれの文字のためにエンゲルスの方法を犠牲にすることである。……エンゲルスの唯物論の「形態」の修正、その自然科学上の命題の修正は、慣用の語彙での「修正主義的なもの」を含んでいなければならず、逆に、マルクス主義によって必然的に要求されるものである。そして、現代物理学の「革命」の内容と、その哲学的「解釈」とをへ特に後者は、英、独、仏、露にわたつて、それを此の特殊性を明らかにしなから論じている。武谷三男による評価もこの章の内容にある。

第三章の「二、経験」という概念に関する「ハーノフの誤り」においてレーニンは、文献解釈主義の批判をやっているが、この第五章は、個別諸科学の内容を超越した普遍的な「認識論体系」——「魔法の公式」へ哲学の貧困」として「弁証法」を考へることによって「イデオロギー」批判が可能だと考へるカント主義に陥っている。「ハーノフ」今日の思慮を思い出すではないか。や、エンゲルス「自然弁証法」の個々の例証へそのかなり多くが、余り適当でない例証）を才能算のように考へている。西欧へ「ニエーター」マルクス主義的伝統に対する内在的批判の萌芽もあり、その他の箇所と一緒にできない部分であり、解党派「メンシエヴィキ」は、いまでもなく、当時ホルシエヴィキに接近した「ハーノフ」に打つても召喚主義「マツハ主義」が解体しえないことを明らかにしたものである。それは何なりとします、レーニン主義自らの立場への志向の表明であつたといえる。しかもこのことは、前述の如き党形成——階級形成の統一の内容に対応したものにほかならなかつた。

実際レーニンは、召喚主義の「フランクシオン学校」との煮しに闘争の一定の勝利的推進の後に打つてい

る。「私がはやくまうがっていたことがわかりました。哲学者ヘーゲルは正しかったのです。生命は矛盾をもつて前進しており、生きた矛盾は、人間の知能にとって最上と思われぬよりも、何倍も豊饒で、多面的で、内容に響んでいきます。私は母校を新しいブラフの中心だとばかり考えていました。それが正しくないことがわかったのです。」という意味は、それが新しいブラフの中心ではなかったという点にあるのではなく、母校はその中心であったし、いまも中心になっていきます。それが不完全であり、全部が正しいとはいえない点にあるのです。主観的には、ある人たちが母校からこのような中心をつくったのであり、客観的には、母校が中心であったし、そのほかに、母校は、ほんとうの労働者の生活から、ほんとうの労働者の前衛分子を獲得したのです。「ヘーゲルキーアでの手紙」。そして一九一〇年には、党内闘争のより断乎たる推進を含んだ、召喚派「フペリヨーダ派、メンシエウキとボルシエウキ」の第一の党中央の再建とともに、一九一一年レーニンの提唱によって党学校が建設された。

「唯物論と経験批判論」に就いては、以上の如き連関の中において把握されなければ、レーニンの「あれこれの文字」のためにレーニンの「オ法」を犠牲にすることにならう。へゆれぬの板権派との闘争における意義と限界をかかざる脈絡の中でとらえなくてはならず、更にレーニン主義の意義が理解されよう。

「哲學ノート」に就いては、その中心テーマは、ヘーゲル「論理学」の弁証法であるが、われわれは、その再把握においても「あれこれの文字」ではなく、「オ法」にたどり着くべきである。「哲學ノート」の問題としてゆかぬばならない。「哲學ノート」の段階に於ては、かつての「唯物論と経験批判論」がほぼ、後期エンゲルスの「フョイエルバツハ論」、「反デューリング論」、「自然弁証法」に基づいていたのに対して、明きらかにそれらの一定の限界をのりこえてゆこうとする志向がみられる。ヘーゲル弁証法の説明を通して、カント主義の徹底した批判とマルクス弁証法へ特に資本論第一巻の継承がめざされた。

いうまでもないことだが、帝国主義戦争勃発とともに顕著された日和見主義の社会排外主義への転化と、そして「国際主義者」へのロッキン、スパーリン、ローチ等々の中間主義的残滓との向いを通じ、全く新たな革命的インタナショナルの断乎たる形成をかりとることこそレーニンの主要な課題であり、「帝国主義」を筆頭に、「社会主義と戦争」「オニインタールの崩壊」「マルクス主義の戯画」などの多

くの論文を媒介にその思想は展開されたのであるが、「哲學ノート」がそれらを貫く基調を確立する要因となつたことを踏まえねばならない。

では、「哲學ノート」における前進（後期エンゲルスカウツキーのレーニンノブからの）とは何であつたらうか。

「フョイエルバツハ論」において、エンゲルスはヘーゲルの否定するべき「体系」から區別して「弁証法的方法」をその「革命的性格」としてとり出したが、いわゆる「絶対的真理」と「相対的真理」との関連について説明したのみであつた。ヘーゲル「唯・経」のレーニンもこのレベル。これに対して初期マルクス「経・哲」において既に、ヘーゲルの「抽象的・精神的労働」に「感性的労働」を対置させつつ、ヘーゲル弁証法批判が行われたことを想起せよ。すなわち、「逆立ちさせられた唯物論」として。

この「フョイエルバツハ論」に対象化された限りでのヘーゲル理解へもちろんエンゲルス自身の理論内容がこの域にとどまらざつたこと（これはないが）をそのまま借用している限りでは、「唯物論」それ自身が「唯物史観」を踏まえたそれではなく、フョイエルバツハのいわゆる「自然科學的唯物論」の拡張的理解に墮す傾向を免れえなれぬものであり、新カント学系などにつけこまれる穴陥を残しているのであつた。

「哲學ノート」においてもその穴陥は必ずしも自覺的に克服されているとはいえない。しかし、「オ三巻・概念論」のヘーゲルによるカント批判の箇所に関する評註はこの課題に接近している。

「カント主義者その他のどれかある流行の論理學および認識論を一步一歩分析するためにはヘーゲルに帰らなければならぬであろう。この実践的要請を明きらかにした文節に就いて「い、くりかえすこと：マルクスはヘーゲルの弁証法を、その合理的な形で経済學に適用した」と問題意識が述べられ、以下の文章が続く。

「抽象的な諸概念を形成し、それらを用いることは、すでにそのうちに世界の客観的連関の表象、確信、意識を含んでいゝ。この連関のうちから因果性（カウズ）とくに抜き出すことははげている。概念の客観性、個別的なものと反び特殊なものにおける普遍的なもの客観性を否定することは不可能である。したが、ヘーゲルは概念の運動における客観的世界の運動の反映を研究するとき、カントその他よりも、と深いのである。ちやうど、単純な価値形態、一つの特定の商品と他の商品の交換という個別的な行為がすでにそ

のうちに、未発達の形で、資本主義のすべてを矛盾を含んでいようには——も、とも単純な概括「普遍化」、諸概念へ判断、推理、等々の最初でも、とも単純な形成かすてに、世界のますます深い客観的連関を人間が認識してゆくことを意味する。ここにヘーゲルの公論理論の真の意味、意義および役割をもとめなければならぬ。

更に「現代のカント主義、マッハ主義、等々の批判の問題について」として。

「1、フレイバーノフはカント主義へおまげ不可知論一般の議論を単にその入口で拒否するばかりで、それを超え、普遍化し、拡張、ありとあらゆる概念の連関と移行とを示すことによつて、ヘーゲルがカントを訂正したようにこの議論を訂正してはいない。その限りでは、彼はカント主義へ及び不可知論一般を、弁証法的唯物論の見地から批判してゐるものである。」

「2、マルクス主義者たちは、19世紀の初めにカント主義者たち及びヒューム主義者たちを、ヘーゲル流にどうよりも、むしろフレイバーノフ流にへおまげビュヒナー流に、註、俗流唯物論者へ批判した。

更に、とは、キリと。

「結局、ヘーゲルの公論理論を全体をよく研究せず理解しないではマルクスの『資本論』、とくにその第一巻を完全に理解することはできない。したがつて、マルクス主義者のうち誰ひとり、半世紀もたつたのに、マルクスを理解しなかつた。」

また、更に評価すべき点としては、マルクス・フレイバーノフ・デーブルとが関連も踏まえ、認識論における実践を論じた部分、唯物生産論が十分でないが前提された「展開されてゐる。」

「このした考察の上に、弁証法の諸要素として三つの、更にその点を詳しく示すものとして十六の規定にまとめ、それを一掃して「対立物の統一の学説」と規定し、「これは説明と展開とを要する」と但し書きをつける。これで、「弁証法のこの側面」を、「認識の法則へおまげ客観的世界の法則」と解し「することができず、「表例の総和」とするフレイバーノフの批判がなされ、かつ「エンゲルスに於つても同じである。しかしこれは、通俗化のため」と述べられる。「唯、終り当時から大きく前進したものである。」

かくしてヘーゲルのカント批判の視点を再確認。「弁証法の三項性」はその外的、表面的な側面である。「しかし三項性をへ概念なしにせよ」を指したことでさえも、それはすでに、カント哲学の限りない功績であるヘーゲルは言つてゐるし、

「ヘーゲルは形式主義を、弁証法の遊戯の退屈さと空虚さとをばげしくののしつてゐる。」

そして、ヘーゲルによる「弁証法とは何か」ということについて極めて悪くない一種の総括」の部分をかなり引用した後、

「これに注意せよ。も、とも豊饒なものは、もとも具体的なものであり、もつとも主観的なものである。」とまとめ。

最後に、エンククロペデーからの抜き書きによる「結論」といふべきもの。

「哲学的方法は分析的でもあれば総合的でもあるが、しかしそれは、有限的認識のこの二つの方法がたんに並列的に、あるいはたんに交替的にもちいらぬへついでに言えば、見田石介が正統派スタは「資本論の方法」はこれだと主張しているのだ」といふような意味においてでなく、むしろ哲学的方法が、両者を揚棄されたものとして自己のうちに含み、したがつてその諸運動のうちどの一つの運動のうちでも分析的であると同時に総合的でもあるという意味においてである。」

なお「分析的」「総合的」とは「哲学的思惟は、それがその対象である理念をただ受けとり、その理念を自由にはたらかせ、そしてその運動と発展とをいけばただ傍観してゐる限りにおいては分析的にふるまうてゐるのであるへこのことに關してレーニンが「資本論」第一巻第五章序論過程論の注を参照せよ、といつてゐるが、これは認識論における飛躍の重要な契機を内包してゐると思われぬ。この限りでは哲学活動はまったく運動的である。しかし、それと同時に、哲学的思惟は総合的でもあり、概念そのものの活動として現れる。しかしそれには、たえず、頭をもたげようとする自己の思ひつきおまげ特殊な意見を自分から遠ざける努力が必要である。」と説明される。

「経済学批判序説」の弁証法へのいま一歩である以上からして、「哲学ノート」におけるレーニンは、マルクス主義の認識論「唯物弁証法の最高の到達点を画しつつも、後期エンゲルスもオニイター理論家によつて忘却の彼方に追いやられていた、マルクス「経済学批判序説」及び「資本論」の概本への方向転換を一定程度果したといえる。その内容はともかく、この時期のはじめに「カール・マルクス」が著せられたことがそれを裏づける。この形式の解説書はロシア最初のものである。」

と同時に、そのことによつて、オニイターにおける修正主義「カント主義批判が何故不徹底に

④ については、反スタはあくまでわれわれの
的立場における、重要だが一側面であり
どの様な形で、スタの反スタを止揚す
るのか、その基準が問題。ここに即して
えば(2)の中にどう内在的に(1)が、くみこま
れるのか？
しかし、我々の所の規程はすでに形成
された。レーニン主義の現代的継承、左派
2号を宣言されたこの立場は、いまやより
具体的に従って豊饒に、かつより、より
的に形成されてゆかばならない。主観

(本号は、「方法」に因して)

《本号の参考文献》(同盟内書除く)

レーニン 「唯物論と経験批判論」

「哲学ノート」

クルプスカヤ 「オニニタの崩壊」
「レーニンの思い出」

梯 明秀 「社会科学の学問的創造」

武石三男 「弁証法の諸問題」
渡辺 啓 「認識論と弁証法」

宇野浩蔵 「資本論と社会主義」
「資本論の経済学」

スターリン 「弁証法的唯物論と史的唯物論」

エンゲルス 「フォイエルバッハ論」

マルクス 「経済学批判、序説」

「共産党宣言」